



よりみち広場に集まり、模造紙に地域の良さをしる学生たち



へりぽーとのメンバー5人、手前中央が橋本さん

スマホ教室の開催も予定している

オンライン集会以ては多くの人が参加



へりぽーと

大学生カフェ 地域に新風

相原町の「よりみち広場」は、家主が空き店舗を地域住民のために開放したコミュニティスペースだ。同じ町内にある法政大学の学生が、周辺住民との交流を深めるため、この場所に目を付けた。カフェやオンライン集会を開くなど、学生らしいアイデアで爽やかな新風を地域に吹き込んでいる。

★ 学生団体「へりぽーと」（橋本空代表）のメンバー5人は、同じ法政大のキャンパス内ではなく、地域のボランティア活動を通じて知り合った。「もっと地域の人とダイレクトに関わる活動をしよう」と、代表の橋本さん（21）がよりみち広場の活用を提案したのが始まり。橋本さんは、地方出身者ながら相原町の地域交流カフェなどに参加し、地域社会に関わり、受け入れられる喜びを感じてきたからだ。

学生達はまず、同広場で多世代交流のできる居場所を作ろうと、2019年10月に「哲学カフェ」をオープンした。高齢者の利用を想定し、世代間ギャップで話題探しに困らぬよう、共通して話せるテーマをメニューとして提供した。「いい男の条件」「ストレスとの向き合い方」など、哲学的な話題があることで、狙い通り来店客との話しは弾んだという。

「人生の大先輩の経験や考え方を聞くことで、いろんな見方ができるようになった」と二神友造さん（22）。年齢の離れた者同士の会話は互いに新鮮だった。多い日で10人以上の来客があるなど、評判も上々だった。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、2月から休業を余儀なくされた。そこで代わりとなるコミュニケーション手段として考えたのが、地域住民とのオンライン集会だ。事前にウェブ会議システムの使い方を教えるなど参加を募り、70代の住民にも参加してもらった。「じっくり研究会」と題した集会は、地域活動での失敗談を披露し合うユニークな趣向で盛り上がり、次回開催も待ち望まれている。また、「よりみちゆうびん」なるポストを設置し、地域の人と文通する取り組みを始めるなど、コロナ禍に負けじと若者の感性を発揮している。

今後は、対面による高齢者のためのスマホ教室を準備している。橋本さんは「相原は地縁の強い土地ながら、活動の場所を与えてくれた。地域の中の潤滑油のような存在になりたい」と話している。

■へりぽーと
helpport0606.info@gmail.com
相原町662の1（よりみち広場）

ホームスタート・いずみ

子育てママ、悩まないで

子育て支援の輪を地域に広げようと、「ホームビジター」の養成や派遣に取り組んでいるのが、家庭訪問型のボランティア団体「ホームスタート・いずみ」だ。

★ ホームビジターとして未就学児のいる家庭を訪問するボランティアは、子育て支援に関する専門の研修を受けた子育て経験者が担っている。プログラムは英国で40年以上前に発祥したもので、孤独になりがちな子育てママに寄り添う支援モデルになるとして、世界22カ国で取り入れられている。

家庭に訪問するホームビジターの役割は、親の気持ちを受け止めて話を聞く「傾聴」と、親と一緒に家事や育児、外出などをする「協働」の2本柱。友人とするような日常的な会話だけで終わることも多く、「これだけのことで助けになるのか」とビジターの中には不思議がる人もいるというが、子どもと二人きりで過ごす親にとっては、孤独や不安を和らげる大きな支えになるのだ。

同団体は下小山田町で児童養護施設などを運営する社会福祉法人基督教児童福祉会を母体とし、2017年に発足。「子育て環境の悪化が原因で親子が離れての生活となる場合もあります。そうなる前に、なにか支援できればと思い、立ち上げました」と宮本和武統括園長は話す。

現在のボランティア登録者は16人。子育ての経験を生かすことができ、家庭の事情に対処する学びの機会を得られるとして、年々登録者は増えている。

子育て世代が多く移り住む町田市にとって、「子育てしやすさ」は、魅力的なまちづくりへのキーワードになっている。「核家族化や近隣住民とのコミュニケーションの希薄化も、ママの孤立化を促進している。インターネットではなく、生身の人の繋がる術は欠かせない」と平本さん。古き良き近所付き合いやおせっかいは形にし、貴重な子育て経験を地域に還元していく。



左から長田美江さん、宮本和武さん、平本理恵さん



散歩しながら会話相手になる「ホームビジター」



全7回の研修で、今の子育て事情を学ぶ

